台大日本語文研究第 22 期
2011 年 12 月，頁 119-140
2011-10-31 收稿，2011-12-06 通過刊登

愛花詩人村瀨栲亭：以江戶漢詩的日本化為中心

朱秋而*

摘要

村瀨栲亭是江戶時期後期儒者，名之熙，字君績，號栲亭。京都人，大概生於延享元年(一七四四)，卒於文政元年(一八一八)，享年七十五歲，以博學多聞著稱，《藝苑日涉》十二卷是江戶後期學者首屈一指的考證隨筆，例如：與對江戶詩風轉變影響深遠的山本北山與栲亭關係也很密切，在《藝苑日涉》序中評論道：

> 栲亭源先生學以經綸爲本色，……日日遊涉藝苑，通古今極宇宙。旁善文善詩，善書畫，善音律，優受人間之清樂。

善書畫，工草書，與上田秋成爲知交，愛煎茶，是寬政年間(一七八九～一八○一)日本代表性的文人。與當時大力提倡新詩風的京都詩僧六如經常有詩作唱酬，也爲六如出版的詩集寫序，其中可清楚窺見栲亭也是主張去除徂徠末流的僞唐詩，他在〈六如菴詩鈔後編序〉認爲「今以詩文自命者，身外求心，境外求情。」「詩者情之苗也，情循境生，離境而求情，皆狂妄耳矣」，亦即詩情與詩境息息相關，情不可離境。

此一寫作理想與規範如何反映在栲亭自身的作品中？又形成何種詩風？以下試舉栲亭詠「燕子花」、「福壽草」「獨活」、「採蕈」等詩作爲例，透過中日詩歌比較的視點與方法，抽絲剝繭，檢討分析栲亭作品，希望釐清其詩風特色與重要性。

關鍵詞：村瀨栲亭、日本化、燕子花、福壽草、獨活

* 台灣大學日本語文學系副教授

Flower-lover Murase Koutei: Japanized Chinese poetry

Ju, Chiou-er*

Abstract

Murase Koutei aged 75 from Enkyo Yr 1 (1744) to Bunsei Yr 1 (1818) born in Kyoto as a famous Confucian in the late Edo Period issued Geiennissyou vol.1-12 as known as the second-to-none notes on textual research back then. Also, he had close relations with Yamamoto Hokuzan impacting the style of Edo poetry that described him as follows: *Koutei having learnt the classics, arts and many other fields is good at essays and poetry, paintings and notes and therefore enjoys his life with pleasure*.

He fond of Sencha (tea) and good at painting and calligraphy as a close friend of Ueda Akinari was one of the representative literati in Japan in Kansei Era (1789-1801). He created his works along with Rikunyo, a Kyoto monk poet initiating a new poetic style and therefore sent a preface to Rikunyo's collection that expressed his assertion against Sorai, pseudo-Tang poetry. From Rikunyoansisyou (a preface to Rikunyo's collection), he stated "those regarding themselves as poets are in pursuit of hearts and sentiments outside bodies and circumstances, respectively", and "poems are buds of sentiments that are born from circumstances and therefore those in pursuit of sentiments outside circumstances are arrogant". To sum up, sentiments and circumstances are interdependent.

How did Koutei reflect his ideal and norm in his works? What kind of style did he form? The researcher attempts to clarify the

* Associate Professor of the Department of Japanese Language and Literature, National Taiwan University

characteristics and importance of the poetic style in Koutei's works such as Kakitsubata, Fukuzyusou, Udo and Matutake through the comparison between poetry and lyrics in China and Japan.

Keywords：Murase Koutei, Japanized, Kakitsubata, Fukuzyusou, Udo

花を愛する詩人村瀬栲亭：近世漢詩の日本化を中心に

朱秋而*

要旨

村瀬栲亭は江戸後期を代表する京都の儒者である。延享元年(一七四四)に生まれ、元年(一八一八)になくなる。博學多聞で知られ、著書『藝苑日渉』十二巻は江戸後期の學者屈指の考證隨筆であり、たとえば近世後期の詩風転換と深く関わる山本北山とも交流している。『藝苑日渉』の序文の中に

栲亭源先生學以經綸為本色，……日日遊渉藝苑，通古今極宇宙。

旁善文善詩，善書畫，善音律，優受人間之清樂。

と書かれている。書畫をよくし，特に草書が巧みである。上田秋成はその知交の一人である。漢詩と煎茶を愛し、寛政年間(一七八九～一八〇一)の代表性的文人である。当時清新な詩風を唱える詩僧六如とも頻繁に詩の唱酬を行う。六如詩集のために書いた序に栲亭が除徂徠末流の偽唐詩を排撃する立場が明らかに見られる。たとえば「今以詩文自命者，身外求心，境外求情。」「詩者情之苗也，情循境生，離境而求情，皆狂妄耳矣」のように、詩情と詩境が深く関わっていることを明言している。

このような詩作態度はいかに栲亭自身の作品の中に反映され、またいかなる詩風を形成したのかはとても興味深い問題である。小論は中日詩歌比較の視点から栲亭が詠んだ「燕子花」、「福寿草」、「独活」、「茸狩」などを例に

詳しく栲亭作品を分析検討し、その詩風特徴と日本化のかかわりを明らかにしたいものである。

キーワード：村瀬栲亭、日本化、燕子花、福寿草、独活

* 台湾大学日本語文学科副教授

花を愛する詩人村瀬栲亭：近世漢詩の日本化を中心に

朱秋而

はじめに

村瀬栲亭(1744-1818)は江戸時代後期の京都の著名な儒者である。名は之熙、字は君績、といい、嘉右衛門とも称する。最初は武田梅竜に古注学を学び、のち清原家に入門した。儒学をもって立ち、秋田侯に仕えた。老いて致仕し、京都に帰って博学をもって世に知られ、その著に『芸苑日渉』十二巻は、近世後期の儒者の考証随筆として屈指の作品である。詩文にも名があり、『栲亭稿』初稿・二稿・三稿が刊行されており、また『栲亭遺稿』十巻がある。六如上人、上田秋成や月渓と親交があり、寛政期の代表文人の一人である。

栲亭の詩風は一般的に宋詩風といわれている。陸游詩の選集を校正し、訓をつけて出版したほどであるので、影響を受けていたことは間違いないであろう。しかし『栲亭稿』を通して読むと、南宋詩風だけでは理解できない作品も多く存在するのも事実である。小稿は栲亭の「燕子花」「福寿草」「独活」「茸狩」という四つの素材を詠じた例を取り上げて、栲亭詩風のもう一つの側面「日本化」を跡付けてみたいものである。

一、燕子花

栲亭が詠んだ「燕子花」(『栲亭稿』初編・巻三）と題する一首が見られる。

幽蘭呈様麗於荷　卻怪靈均不採他 洛浦嬌容凌水立 朝陽軟舞向風多
亂舞玄燕迷情渚　百頃紫煙簇晩波 不恨芳妝經雨敗 舊羅褪去換新羅

A. 表記について

詩題の「燕子花」は、。日本では「杜若」と同じ、古くから親しまれてきた「かきつばた」を「燕子花」に宛てて表記して現在に至

るまでである。不思議なことに一見中国にもありそうな詩文の風物であるが、調べた限り本家の漢詩文にはほとんど類例をみない植物である。大槻文彦の『大言海』は、「燕子花」を唐土の用法としているが、はたしてそうであるのか。この疑問を解くためにまず「燕子花」という名称の由来とこの草花における日中文学認識の相違の有無を徹底的に検証する必要があろう。

東シベリア、中国北部、朝鮮、日本各地の池沼、水辺などの湿地に生え、観賞用に栽培もされる「かきつばた」を「燕子花」・「杜若」と書くが、漢名としてはいずれも誤用というのは現在日本語学者の認識である[1]。『楚辞』に描かれる白い花を咲かせる香草である「杜若」が、平安時代に誤って「かきつばた」の漢名として使われたことは見てすぐわかるように、贅言する必要はないと思う。五～六月頃、茎頂の苞（ほう）の間から濃紫色の花を二～三個次々に開く「かきつばた」の漢字表記を時代順で眺めてみよう。

和名は書付花（かきつけばな）の変化したもの、昔はその花の汁で布を染めたところからいう「かきつはた」は日本最古の和歌アンソロジー『万葉集』〔8C 後〕をはじめ、早くも日本文学に登場した[2]。

＊一〇・一九八六「吾れのみや斯く恋すらむ垣津旗（かきつはた）につらふ妹は如何にかあるらむ〈作者未詳〉」

＊一一・二五二一「垣幡（かきつはた）につらふ君をゆくりなく思ひ出でつつ嘆きつるかも〈作者未詳〉」

＊三・一三六一「住吉の浅沢小野の垣津幡（かきつはた）衣に摺り付け着む日知らずも〈作者未詳〉」

---

1 『国語大辞典』「燕子花・杜若」項目の解説参照。

2 花汁を染料としたところからカキツケハナ（掻付花）の転〔言元梯・大言海〕。カキツケ（書付）バタの義。バタはハナ（花）の転呼か〔日本古語大辞典＝松岡静雄〕。

＊十一・二八一八「垣津旗（かきつはた）佐紀沼の菅を笠に縫ひ着む日を待つに年そ経にける。〈作者未詳〉」

＊十二・三○五二「垣津旗（かきつはた）佐紀沼の菅の根の絶ゆとや君が見えぬこのころ」

＊一七・三九二一「加吉都播多（カキツハタ）衣に摺りつけ大夫のきそひ猟する月は来にけり〈大伴家持〉」

枕詞：①カキツバタのように美しい意から、美しい意の「につらふ」「にほふ」にかかる。

「につらふ」は「丹面ふ」、即ち、頬がほんのりと赤みを帯びる意。一九八六番歌の大意は「私だけがこのように恋をしているのだろうか、カキツバタのように美しい妹はどのようなのであろう。」そして二五二一番の歌は「カキツバタのように美しい紅顔の君を、はしたなくも思い出しては溜め息をついたことだなあ。」[3]という意味であろう。

②カキツバタが咲くというところから、「さく（咲）」の連用形「さき」と同音の地名「佐紀」にかかる。

③家持の歌のように染料としてカキツバタが詠まれている。

万葉人はカキツバタを「垣津旗」と「加吉都播多」で記し、「杜若」も「燕子花」も見当たらない。また、平安初期に成立した『本草和名』〔918 頃〕にも「蠡実〈略〉一名独行子 一名猱首 和名加岐都波太」とある。

[3] 佐竹昭広ほか校注『萬葉集』二、三（「新日本古典文学大系」2000 年、2003 年、岩波書店）参照。

また『作庭記』（1040 年頃）という本の中に、

> 沼盜ハ、石をたつることはまれにして、こゝかしこのいり　　江に、あし、かつミ、あやめ、**かきつはた**やうの水草をあらしめて、とりたてたる島などはなくて、水のおもてを眇々とみすべきなり。〔138 行 8-58〕

と「かきつはた」を仮名で記載する。一方、目を古辞書に転じてみよう。三巻本『色葉字類抄』に、

> **劇草**（ケキサウ）［**入**○］カキツハタ。**馬藺**（リン）［**去**］同。**由跋**（ハツ）［**入**］同。**蜀葵**同。〔前田本上巻・加部植物部門 92 ウ〕

とあり、「劇草」「馬藺」「由跋」「蜀葵」をカキツバタと訓む。時期的に近い『今昔物語集』（1120 頃）にに「カキツバタ」の漢字として「劇草」を使う例が見える。

> 其澤ノ邊ニ木隠ノ有ケル、業平下リ居テ餉食ケルニ、小河ノ邊ニ**劇草＝**（言+慈）ク栄タリケルヲ見テ、具シタリケル人掩ノ云ク、「**劇草**ト云フ五文字ヲ、句ノ頭毎ニ居ヘテ、旅ノ心ノ和歌ヲ讀メ」ト云ケレバ、業平、此ク讀ケリ、カラコロモキツヽナレニシツマシアレバ、ハル転キヌルタビヲシゾオモフト。人々此レヲ聞テ、哀レニ思テ泣ニケリ。〔巻第二十四・在原業平中将、行東方讀和歌語第卅五〕

同時代の『伊勢物語』や『源氏物語』なども同じくかな表記の「かきつはた」が使われている。『国語大辞典』が各時代を代表する古辞書を精査した結果を次に掲げておこう。

> 杜若（名義・下学・文明・明応・天正・饅頭・黒本・易林・書言・言海）
>
> 劇草（和名・色葉・名義・明応）
>
> 馬藺（色葉・名義・明応）
>
> 由跋・蜀葵（色葉）（和玉）

『類聚名義鈔』僧上の四七・六「杜若　カキツハタ」とあるのは、「杜若」表記の早い資料である。「燕子花」という漢字表記はいつ

からなのかは、現段階の諸辞書に徴しても不明のままである。近世前期の儒者貝原益軒（1630-1714）は確かに「燕子花」を「カキツバタ」と訓読した一人である。『和漢三才図会』（1712 自序）の寺島良安もそう解釈している。

また江戸中期を代表する画家尾形光琳（1658-1716）の燕子花を主題にした「燕子花図」とりわけ有名である。「伊勢物語」の八橋から取材した六曲一双の屏風（国宝、根津美術館蔵）の画題は比較古い使用例になるかもしれない。それから国学者の賀茂真淵（1697-1769）も『冠辞考』の中で「カケリツババナ（翔燕花）の義」と述べ、花の形が燕の伸び立つのに似ているところから名づけられると「かきつばた」の語源を論じていた。

さらに近世後期の俳書『滑稽雑談』(正徳十六年刊)巻八の六五「燕子花」条に『和訓義解』の次の部分を引いて語源の由来を説明する。

> かきつばたとは、かきはかけり也、けりの反き也、つははつばめの略、たは立の下略也、此花の形、燕の伸立するに似たり、故に名づく。

また、この項目の冒頭に、

> 『漳州府志』曰、燕子花、溪蛮叢笑云、紫花、全類燕子、一枝数葩、漳人名為紫燕。

中国文献を俎上にあげ、「燕子花」という漢名の正当性を跡付けようとする。明万暦年間刊行の『漳州府志』が南宋朱輔の『溪蠻叢笑』の「燕子花」を引用している。『滑稽雑談』引用の「一枝数葩」、つまり一枝に複数の花が咲くだけでも「かきつばた」との一致性を不審に思うが、孫引きなので、原書に当たってみると、次のようなものである。

> 紫花全類燕子、花生於藤、一枝數葩。

二句の間に「花生於藤」という細かい描写があり、花は藤（つる状に生える植物）に生えるとあって、日本の「かきつばた」と明らかに別個の花であろう。

四庫全書で調べた「燕子花」の用例は全部『溪蠻叢笑』によるものである。日本の「燕子花」という名称は中国に由来する可能性は極めて低いと見てよいであろう。　中国北部の一部にも生えるかもしれないが、しかし詩人たちにとっては普遍的な存在ではなさそうだ。むしら中国原産の同じアヤメ科の「一八」即ち「鳶尾」のほうが文献上でよく知られている。万葉時代から日本自生の「カキツバタ」を愛でてきた日本人は、大陸より伝来した「鳶尾」の花の形や特性を細かく把握している。和名の「いちはつ（一八）」もその開花がいちばん早いから「一初」と呼ばれる。これは室町中期の文明本『節用集』によるものである。『和名類聚鈔』巻二十にすでに登場し、「鳶尾　　本草云鳶尾一名烏園　和名古夜須久佐」とある。

B.文学の素材として

前掲の『万葉集』の複数の和歌からわかるように、春の終わりごろから夏にかけて沢や沼などの湿地で一面に咲く青紫色の「カキツバタ」は、古代日本人を魅了した美しい花の代表である。恋人の容姿を喩える歌の素材として愛用されていた。

平安時代に入ると、『伊勢物語』〔10C 前〕第九段の「東下り」に、

沢のほとりの木の蔭に下りゐて、乾飯（かれいひ）食ひけり。
その沢にかきつはたいとおもしろく咲きたり。

主人公の男は三河の国の八橋の沢に風趣のあるさまに咲いていたカキツバタに偶然出会った描写がかな文学の名場面として知られる。『業平集』や『古今和歌集』にも収録される。

やや後になる『古今和歌六帖』第六帖は「カキツバタ」を歌の標目として掲げる[4]。万葉以外に平安中期の歌人貫之ら「カキツバタ」を取り入れた歌も選ばれる。例えば

[4] ほかにも『栄花物語』〔1028-92 頃〕根合「皇后宮のは、昌蒲・楝（あふち）・瞿麦（なでしこ）・かきつばたなど、かねして花鳥を造り、口置き、いみじき事どもを尽させ給へり」や『増鏡』鏡〔1368-76 頃〕一六・久米のさら山「出（い）だし車に、色々の藤・躑躅（つつじ）・卯の花・なでしこ・かきつばたなど、さまざまの袖口こぼれ出でたる」、『後撰集』夏「 いひそめし昔の宿の燕子花色ばかりこそ形見なりけれ」がある。

いひそめしむかしの人のかきつばた色ばかりこそかたみなりけれ
かきつばたにほへるいもをいさなみにおもひ出でつつなげきけるかも
君がやどわがやどわけるかきつばたうつろはんとき見ん人もがな　貫之
返事　興風
むつましくかこひへだてぬかきつばたたがかたちかはうつろひぬべき
又　貫之
ただぢにて君がこえこんかきつばた風をはかりてうつろひぬべそし
つねならぬ人くるやまのあきつののかきつばたをしゆめに見えつつ

女性をめぐっての問いかけの歌とその返歌である。このような日本和歌や物語に恋の描写や風雅の景物として好まれる「カキツバタ」の表現手法は、鎌倉、室町時代になっても脈々と継承され、謡曲「杜若」まで出現したほどである。中世の連歌式目『連歌新式』に「杜若　牡丹、歌題に両説ありといへども、景物少なきにより、夏にこれを入る」とあり、江戸時代の俳諧に「燕子花」の佳句が多く芭蕉と蕪村の作品を見てみよう。

有り難き姿拝まん杜若　芭蕉
杜若似たりや似たり水の影　〃
杜若語るも旅のひとつかな　〃
杜若我に発句の思ひあり　〃
貧乏な御下屋敷や杜若　蕪村
かきつばたべたりと鳶のたれてける　〃

とくに蕪村の「燕子花」から「鳶」の連想はおそらく中国の「鳶尾」に関連しているだろう。「燕子花」という七言律詩に栲亭は「麗於荷」、「靈均不採」、「嬌容」、「乱舞」「玄燕」「迷情渚」、「百頃紫煙」、「芳妝經雨」、「舊羅褪去換新羅」という多くの描写を重層に駆使し、「かきつばた」沢一面に咲いていた「かきつばた」の美しさを捉えようとしている。詩人が苦心して描こうとしている「カキツバタ」の風雅の世界や美意識を理解するのには、「燕子花」や「鳶尾」詩歌の存在しなかった中国の漢詩伝統というより、『万葉集』『伊勢物語』で培われてきた「かきつばた」文芸の伝統に依拠することが大きいと

いっても過言ではないだろう。栲亭もそれを意識的に試作に取り入れていると思う。

二、「福寿草」・「独活」

（1）福寿草

『栲亭三稿』巻三に「咏福寿草 並序」と題する詩は次のように詠われる。

> 福壽草莖如春蘭，長二三寸，花似金盞花色黃，以歲首開，故俗亦名元日草。至二月結實，如蛇苺，葉似野胡蘿蔔。草家或以為桂海花志所載側金盞花，未知是否。花師臘末以稚松、早梅、南燭之類，併植於盆中，以饋平日鬻花家。然位置矮鎖，竟非佳翫。唯白瓷盆中栽數十莖，風致殊佳，春初置之几案側，與瓶梅相掩映，亦復不可廢也，戲賦一絶，補花曆之闕云。
>
> 奇與梅花將競贏　駢頭冒雪報新正 年年不老黃金色 買得春風第一名

長さわずか二十八文字の絶句を百字を超える序文が付されている。序の内容は当時元日の飾りとしての「福寿草」が植木屋（花師）によって盆栽風に植えられることやそれについての詩人栲亭の好みを述べている。詩の内容は第一句「奇與梅花將競贏」と、やはり漢詩では春の花として珍重される梅を引き合いに「福寿草」を引き立てる。二句目は雪にも負けずお正月を知らせてくれるように開花する。転句は毎年変わらず鮮やかな黄金色な花は老いもせずめでたいものだと詠い、結句は春早々に咲くから春風を独り占めできるほどと福寿草を最高の賞賛「第一名」に値すると締めくくっている。栲亭の時代に福寿草を愛好する風潮があったことは垣間見ることができるおもしろい一首である。

しかし、福寿草は中国漢詩に見たことも聞いたこともない花草である。詳しく調べてもまったく類例を見ない。どんな花かというと、「ことぶきぐさ」、「ついたちそう」、「がんじつそう」ともいう。、キンポウゲ科の多年草。各地の山に生え、正月の祝花用として栽培さ

れる。早春、新葉とともに径三～四センチメートルの花をつけ、花弁は光沢のある黄色で個ある。[5]

[6]

江戸時代の俳諧書『毛吹草』(1638) 序に「先春たてば福寿草（フクジュサウ）の花、黄梅、白梅の色香もあらたまりつつ」と載せている。『花譜』(1698) 中・正月にも「福寿草 又ふくづく草ともいふ。〈略〉春の初花をひらく。故に元日草といふ。盆にうへて、新春席上の清賞とす」と記している。また『滑稽雑談』(1713 年刊) 巻二に載ってあるが、「此物本名不詳」とされている。また「初春に盛花の時は、只盆器にうつし置て席上の賞とす、洛北・矢瀬・大原なんどより貴家に献ずるよし也」と、京都で貴顕の家に好まれたことを紹介する。

それに栲亭が序文の中に「桂海花志所載側金盞花、未知是否」と、「桂海花志」の記載によると「側金盞花」というが、しかし正しいかどうかは判断できないと自分の考えを述べている。しかし明治期の『日本植物名彙』(1884)「フクジュサウ 側金盞花」と事実のように書かれる。この漢名は本日の辞書でも受け継がれている。しかし、「福寿草」と同じように「側金盞花」はどんな花なのかも進歩的な検索を使っても得られる情報は極めて少ない。栲亭がいう「桂海花志」は正しく言うと、南宋三大詩人の一人范成大が桂林に入ったときの見聞を記録した随筆『桂海虞衡志』である。その「花志」の最後の箇条は

側金盞、花如小黄葵、葉似槿、歳暮開與梅同時。

とある。「黄金色や開花の時期は梅と同じ」などの記述は日本の「福

[5] 『国語大辞典』(第２版、三省堂)「福寿草」の項目参照
[6] "ふくじゅ - そう【福寿草】", デジタル大辞泉, ジャパンナレッジ （オンラインデータベース）, 入手先＜http://www.jkn21.com＞

寿草」に似通っている。しかし、明李時珍『本草綱目』「黄蜀葵」項の集解に、

六月開花、大如椀、鵞黄色紫心六瓣、而側旦開午收暮落、人亦呼為側金盞花、隨即結角（後略）。

とある。清の『御定月令輯要』巻二の「金盞花　増陶朱公書、金盞花如小盞、八月中下種、即出臘月開花、至春尤盛、四時相繼不絶」と照らし合わせてみると、中国の「側金盞花」はオクラの類の植物で、「福寿草」でないことが一目瞭然である。江戸時代の福寿草愛好は日本独特な美意識に基づくものであろう[7]。岡田米山人（1744-1820）「福寿草」や歌川国定（1768-1864）「松本幸四郎の福寿草売り」が絵にしている。

お正月の季語として江戸時代に福寿草の俳諧がたくさん詠まれている。いくつか例を挙げておこう。

りんの中に春やもてくる福寿草　信徳『木玉集』
福寿草一寸物の始なり　言水『初心もと柏』
蘭鉢は雪を持つらん福寿草　言水『〈万歳楽』
花よりも名に近づくや福寿草　千代女『真蹟』
小書院のこの夕ぐれや福寿草　太祇太祇句選後編』
朝日さす弓師が店や福寿草　蕪村『蕪村遺稿』
歳月日三のかほりや福寿草　蕪村「摺物」
ひともとはかたき莟やふく寿草　召波『春泥発句集』
福寿草咲くや後に土佐が鶴　大魯『蘆陰句選』

拷亭の詩はこれらの句と同工の妙と言わなくても、趣向はかなり近いといえよう。

（2）「独活」

日本人の食材としてなじみのある「うど」を漢字で書くと「独活」になる。中国では漢方薬として使われるが、詩文にほとんど文学作

7 『和漢三才図会』（正徳三年）に「按ずるに、福寿草は洛東山渓に陰処これあり。冬枯れ、春宿根より生ず。……歳旦に初めて黄花を開く。半開の菊花に似たり。人もつて珍となし、盆に植ゑて元日草と称す。春夏長じて尺余、枝条を生じて花ほころび開き、見るに堪へず」とある。

品に無縁な草木である。しかし栲亭稿巻二に「題呉月渓独活芽図為大愚上人」と題する作品が見られる。内容は次の通りである。

圃人為圃競新鮮　犯雪紅芽已放拳　何時遠逐胡王使　隨處旋抽炎帝鞭
嫩脆堪誇羹白玉　清芬將笑鮓青蓮　條苗不俟風無動　且供真如醉裏禪

友人月渓の絵の題画詩で、第二句の「犯雪紅芽已放拳」はまるで芭蕉「雪間より薄紫の芽独活哉 」発句の翻案である。



独活は俳句の材料の一つで江戸時代だけでも数百にのぼる句作が見られる。例えば、

玉独活のうつくし苣の早苗の薄緑　　虚栗
白髪勇む越の独活刈り　　冬の日
日の影に猫の抓出す独活芽哉　　続猿蓑
声毎に独活や野老や市の中　　続猿蓑
独活もはや喰はれぬ迄の若葉哉　　蕪村
今ははや独活も喰はれぬ若葉哉　　蕪村

があり、見ればわかるように多種多様な技法を発揮し、独活を詠んでいる。

蕪村も手紙で「前 一、先日の独活、さてさてけしからぬ風味、香気あたりを払う」と独活の風味に触れている。栲亭の「独活」詩は「嫩脆堪誇羹白玉、清芬將笑鮓青蓮」 のように、独活に対して日本的素材に対する自信と俳諧趣味に満ちていると思う。

三、茸狩り

栲亭の詩集巻三に「採蕈行五首」という連作がある。次のように詠ずる。

① 紫茄老卻橘將黄　松蕈此時獨擅場　知道溪翁擔入市　微風簾外舞山香
② 朝朝齎榼出城闉　箇箇無非採蕈人　踏破雲煙鬧如市　山靈何處避囂塵

③ 趁香土女涉屡顔　鉤袂裂裳荊棘間　貪多眄睞不離地　終日在山誰見山
④ 近山蕈少遠山多　豈不愛多只愛近　豪俠那須問有無　白雲郷裏醉紅多
⑤ 遊踪錙續進城山　秋到都無一尺閑　山人日日無由給　買蕈通宵插樹間

詩題にある「採蕈」は見たとおり、秋のきのこを採ることである。中国の詩集などを調べた結果、実は僅か二例しか見つけることができなかった。一つは唐代の僧侶詩人貫休の『禪月集』巻六の「別杜將軍」

伊余本是胡為者、採蕈鋤茶在窮野、偶披蓑笠事空王、餘力為文擬何謝

自分の出家や隠居生活は「きのこを採りと茶畑を耕すことだと語っている。キノコの総称で松茸のような特定なキノコではないことがわかる。もう一例は　宋の毛滂『東堂集』巻二にある「隋堤採蕈」「(前略) 楡堤雨潤風力和、老楊出菌鶵駢觜、輪囷長芽長雲葉、磊落小叢攢玉蘂、呼兒採掇歸自烹（後略)」

これも隋堤の木々に生える種々のキノコを詠んでいると思う。漢詩の素材としてはほとんど一度も重要視されたことがなかった。「採蕈」は詩語としての地位はつい中国文学史上で確立することはできなかった。しかし、江戸時代の漢詩人たちは「採蕈」というテーマを好んで取り上げる。梛亭もその中の一人である、松茸と茸狩りを好尚する感性は、梛亭個人独特な趣味や発見ではない。実は日本古来の伝統文芸に根付いていると考える。というのは『万葉集』巻十・二二三三・芳を詠みき

高松のこの峰も狭に笠立てて満ち盛りたる秋の香の良さ
（「詠芳」:「高松之　此峯迫尓　笠立而　盈盛有　秋香之吉者」）

現代語訳：高松山この峰も狭いほどに笠を立てていっぱい盛りになっている秋の香りのよいことよ。

この歌は何を詠んでいるのかは、江戸時代の本居宣長は『玉勝間』「十三・梅の花の歌に香をよむこと」に次のように述べている。

いにしへはすべて香をめづることはなかりし也。橘の歌も、万葉にいと多けれども、それも香をよめるは、十七の巻と十八の

巻とに、ただ二首あるのみなり。其外十の巻に、茸をよめる歌、…とよめるなどより外には、すべて物の香をめでたる歌を見えず、にほひとおほくよめるは、みな色のにほひにて、鼻にかがるる香にはあらず。さて件の十の巻なる歌は、松茸をよめるにぞ有りける。はしに詠芳とある、芳の字は、茸を写しひがめたる也。[8]

「さて件の十の巻なる歌は、松茸をよめるにぞ有りける」と、宣長は松茸を詠んでいることを明言する。時代が降って、平安時代の『古今和歌集』〔905-914〕秋下・三〇九・詞書「きた山に僧正へんぜうとたけがりにまかれりけるによめる」[9]と、素性法師が僧正遍照と一緒に北山へ茸狩りに出かけたという。これが今知られる茸狩りの古い使用例である。

『夫木和歌抄』秋に、鎌倉初期の寂蓮の「秋山」の歌も

松が根の茸がり行けばもみぢ葉を袖にこき入る山おろしの風

松茸を詠んでいる。室町時代になると、謡曲「盛久」〔1423 頃〕「ひと年小松殿北山の茸狩りの遊路の、ご酒宴において」のように、秋の風雅な遊楽行事としてかなり定着していたと思う。近世に入ってからも、「茸を求むなり。桜狩、紅葉狩と同じ」(『しをり萩』) や「なべて茸類を狩るとはいへども、まづ松茸を第一とす」(『改正月令博物筌』) と、町人文学俳諧の普及でますます茸狩り、松茸への愛好が広く深くなっていったと見てよい。

この五首の内容と表現をもう少し立ち入って検証してみたいと思う。まず一首目の冒頭「紫茄老卻橘將黃」で紫色の茄子と橘で季節が秋だと景物を使って詠う。実はこの手法はきわめて同時代の和文芸俳諧に似ている。次の芭蕉一門の四例を見れば納得していただけると思う。

秋涼し手毎にむけや瓜茄子　　芭蕉
守山の仁王の瘤や秋茄子　　許六

[8] 佐竹昭広ほか校注『萬葉集』三 (「新日本古典文学大系」岩波書店　2002 年) 参照。
[9] 小島憲之・新井栄蔵校注『古今和歌集』(「新日本古典文学大系」岩波書店 1989 年)。

紫のゆかしさ見せよ初茄子　　支考
橘のゆかりや今の初茄子　　支考

はじめから俳諧的な趣向が漂っている。連作を通してみれば、その詠み方は次の近世の俳諧作品に通じる部分は少なくない。次に掲げておこう

おなじ料理をあすも茸狩り　　宗因
たけがりや見付けぬ先のおもしろさ　　素堂
茸がりやあぶない事に夕時雨　　芭蕉
松茸や知らぬ木の葉へばりつく　　芭蕉
茸狩りや似雲が鍋の煮ゆるうち　　蕪村
茸狩りや頭を挙ぐれば峰の月　　蕪村
北山ゆゆし茸狩りの供奉　　時勢粧
茸狩りにお城まはりの山つづき　　国の花
女中の茸狩りをみて
茸狩りや鼻のさきなる歌がるた　　其角
行かずして都の土や茸狩り　　其角
茸狩りやひとつ見み付つけて野も山も　　琴風
茸狩りや荊の中も手を入るる　　蝶羽
茸狩りや又異方に人の跡　　土芳
茸狩りの空手もどる騒ぎかな　　一茶書簡
うそうそと嗅いで廻るや菌狩り　　末若葉
松茸や飯台につく田舎客　　笈日記
松茸や都に近き山の形　　惟然
めかれたる松茸市の夜さむかな　　井華集

松茸と「市、女性、山々、騒ぎ、嗅ぐ、夜、面白さ、都」など、と語彙・素材・発想において多くの共通点を考えると、栲亭の「採蕈行」詩は中国漢詩伝統に基づいて作り出された作品のみでは説明しきれず、むしろ万葉、古今など脈々と継承されてきた日本の松茸好みと茸狩り風流に由来し、かなり俳諧趣味をかもし出している近世後期漢詩の日本化を表している作品と見たほうが妥当であろう。

終わりに

栲亭が晩年に詠じた「愛花人詞　五首」

史載大江佐國者，性酷愛花，嘗有六十餘回看不足，他生定作愛花人之句。沒後，其子夢父來告曰：我今化為胡蝶。每春遊於花園，已覺，不勝感慕，多種花木，塗蜜於花房，以供養群蝶云。其事極奇，而詩不見全篇，因竊補之，命曰愛花人詞。

一花看損一花新　占斷百花領九春　六十餘回看不足 他生定做愛花人

『栲亭三稿』巻三

平安後期の漢学者大江佐國が花をこよなく愛し、なくなった後も胡蝶に化した逸話を序文に記し、その詩句「六十餘回看不足 他生定作愛花人」を踏まえて七言絶句をうたった。栲亭の詩集を繙けば、草花を詠み込む作品は随所見られる。桜やもみじを詠ずるときの参考材料として『垂糸海棠詩纂』と『楓樹詩纂』[10]を著した。大江佐国に共感した栲亭もまた花を愛する人である。

栲亭は従来、漢詩に好んで詠まれてきた梅や牡丹には満足せず、古くから日本人に愛好されてきた桜を「「桃花羞死李花嘲、不見一花足比倫」のように、中国の春の花の代表である桃の花や李の花は到底桜の美しさの足元にも及びませないと誇らしげに詠う。[11]桜のみならず、中国ではほとんど知られていない鳶尾花の仲間「燕子花」（「杜若」とも書かれる）の優艶な美しさを克明に描き出した。其の表現しようとしている美的感覚は実は万葉以来池や沼に一面に咲く紫色の「カキツバタ」に由来する。また近世になって其の姿を燕に見立てたようになり、燕子花と書かれるようになった。しかし、日

[10] 『垂糸海棠詩纂』二巻、『楓樹詩纂』二巻、刊本。

[11] 日野龍夫教授は「桜と日本近世漢詩」(『日野龍夫著作集』第一巻所収 P.461-462、2005年、ぺりかん社）一文の中に
（六如より）やや後輩の村瀬栲亭に至ると、桜を日本独自の誇るべき花とする意識は明瞭である。「桃花羞死李花嘲、不見一花足比倫」……。桜が中国の花にまさることを強調し、日本の故事をことさらに取り入れて、桜を単なる春の一景物以上のものとして扱おうとする。
其の一の第一・二句にいうところは、栲亭が創始したものかどうかは知らず、やがて桜を詠ずる際の一つのパターンになったようである。

本の燕子花（カキツバタ）は南宋朱輔の『溪蠻叢笑』に出てくる「燕子花」とまったく異なる花が明らかである。そして山に生え初春に開花する「福寿草」という花も江戸時代になって始めてその黄金色のめでたさと姿の可憐さが発見され、中国には見出せないきわめて近世趣味的なものである。范成大の随筆『桂海虞衡志』の「花志」に記された「側金盞」と同じ花かどうかははなはだ疑問であるが、しかしそれはどうでもよい。中国漢詩には「福寿草」を愛でる先例や美感覚はどこにも見出せない。栲亭の「福寿草」詩は俳諧や近世絵画などに現れる日本的な美意識がなければ生まれないのであろう。

それに「独活」は和名うどのことである。漢字表記は中国の文献によるもの、日中の呼称上食い違いはないが、中国ではやはり詩に登場しない未知な存在である。一方、日本では生活に密着した食材として非常に親しまれている。近世の俳諧に至って芭蕉や蕪村を始め、たくさんの「独活」の句が詠まれている。栲亭の詩の題「題呉月溪独活芽図為大愚上人」が示したように絵画のテーマにもなっている。独活を描く詩も俳諧など近世的な愛好と感覚に通ずるものと言わざるを得ない。

最後の「採蕈行」は、栲亭と親交のある六如にも類似なテーマを詠んでいる。しかし中国漢詩にもキノコ採りを詠む詩歌伝統を見出すことは困難である。もちろんかといってこれを簡単に栲亭や六如ら近世詩人の独得な素材や発想と片付けては行かない。なぜかと言うと、万葉和歌「高松のこの峰も狭に笠立てて満ち盛りたる秋の香の良さ」から膨大な近世俳諧の「茸狩り」にひきつながれてきた日本和文学の伝統がある。栲亭は「六如菴詩鈔後編序」に

> 今以詩文自命者，身外求心，境外求情。……殊不知古今殊制，風俗異趣，詩曰物其有矣，為其時矣。…詩者情之苗也，情循境生，離境而求情，皆狂妄耳矣。…境無常狀，故詩無常調，情循境而生，發乃形於詞，平淡亦可，奇險亦可。

古今の制度が違い、風俗の趣向も異なるから、詩は真実な感情と現実に基づいて詠いじられるべきだと主張する。中国の漢詩にないか

つて古文辞派に排除された和習的な素材や美意識や発想は、栲亭にとって真情実景を表現する格好な題材となり、近世後期漢詩の日本化の一面を垣間見ることができたと思う。

参考文献

富士川英郎ほか編『詩集 日本漢詩』全二十冊、昭和63年、汲古書院。
同前『詞華集 日本漢詩』全十冊、平成2年。
池田四郎次郎『日本詩話叢書』全十冊、平成9年、龍吟社復刻。
日野龍夫ほか編『江戸詩人選集』全十巻、平成5年、岩波書店。
森銑三『森銑三著作集』昭和46年、中央公論社。
同上『森銑三著作集』続編、平成4年、中央公論社。
『中村幸彦著作集』全十五巻 昭和58年 中央公論社
富士川英郎『江戸後期の詩人たち:鴟僊庵詩話』昭和41年、麦書房。
同上『菅茶山』上下、平成4年、福武書店。
揖斐高『江戸時代詩歌論』平成10年、汲古書院。
同上『江戸の詩壇ジャーナリズム一五山堂詩話の世界』平成13年、角川書店。
松下忠『江戸時代の詩風詩論—明・清の詩論とその摂取—』昭和41年、明治書院。
中村真一郎『詩人の庭』昭和51年、集英社。
同上『江戸漢詩』「シリーズ古典を詠む20」昭和60年、岩波書店。
同上『頼山陽とその時代』昭和46年、中央公論社。
同上『蠣崎波響の生涯』平成元年、新潮社。
鈴木健一『江戸詩歌史の構想』平成16年 汲古書院。
杉下元明『江戸漢詩—影響と変容の系譜』2004年、ぺりかん社。
徳田武『近世日中文人交流史の研究』2004年、研文出版。
水田紀久『近世文芸論考』平成5年、明治書院。
同上『江戸詩人伝』昭和61年、ぺりかん社。
野口武彦『江戸文学の詩と真実』昭和46年、中央公論社。
宗政五十緒『近世の雅文学と文人』平成7年、同朋社。

高橋博巳『京都藝苑のネットワーク』昭和63年、ぺりかん社。
池澤一郎『江戸文人論―大田南畝を中心に―』平成16年、研文出版。
興膳宏ほか編『伊沢蘭軒』（「鴎外歴史文学集」）平成11年、岩波書店
「和漢比較文学会」編『和漢比較文学叢書』平成8年、汲古書院。
中村幸彦編『近世の漢詩』昭和 61 年、汲古書院。